Twelve Pachinko Gals

作＝かねたたき

今日もまた負けた。

俺はとぼとぼと帰路についた。３月にあのパチンコ台を見かけてから、毎日のように打っているが、大当たりをしたことがない。これまでにつぎ込んだ金は、軽く１００万を超えるだろう。いいかげん、こんな生活はやめないといけない、ということはわかっている。しかしせめて大当たりするまでと、ずるずる続けてきた。借金も、今度の給料では完済できないほどになっている。

街中とはいえ人通りはそれほど多くない。と、そのとき、目の前のビルから女性が出てきた。その女性の姿を見て、俺は驚いた。

そう、その女性は、俺が負け続けているパチンコ台に登場している１２人の女たちだったのだ。

そのとき俺の心は、アイドルを生で見ることができたという喜びよりも、俺が負け続けている原因を作った相手に出会ったという怒りに支配されていた。もちろん逆恨みだが。

「おい、ちょっと待てよ」

俺は女たちの前に立ちふさがった。

「何？　あなた、私たちにいったい何の用なの？」
「あなたは私たちのことを知っていても、私たちはあなたなんか知らないんだからね」
「せっかく私たちをモデルにしたパチンコ台が、業界一の売り上げになったパーティーで盛り上がったのに、水を差さないでよ」
女たちが口々に言う。その言葉に俺はかっとなった。
「何が業界一の売り上げだ、この野郎。俺はその台のおかげで借金まみれになっているんだぞ」
「そんなの、私たちのせいじゃないでしょ。あなたが負けるのがいけないんじゃない」
「うるさい。特におまえだ」
俺は女たちの中で一番胸の大きいハルミを睨みつけた。
「何が、『私の腕前、見せてあげる』だ。はずしてばかりいやがって」

ハルミはむっとした顔になった。構わず俺は続けた。
「いつもいつもはずした上に『ごめんね』の一言だけか。本当に悪いと思ってるんなら、その胸で俺のものを挟み込むぐらいのことをしやがれ」
そう言ってハルミの前で仁王立ちになった俺を、激痛が襲った。ハルミが俺の金玉を蹴り上げたのだ。俺は股間を押さえてうずくまった。
「何よ、黙って聞いてりゃいい気になって。自分が弱いのを私たちのせいにして、ただじゃおか

ないからね」
薄れゆく意識の中で、俺はハルミの怒気を含んだ声を聞いた。

俺は意識を取り戻した。まだ下腹が痛む。ここはどこだ？ぼんやりと辺りを見回してみる。目の前に１２人の女たちがいた。
「ようやく気がついたみたいね」
エイコが口を開いた。
「ここは私たちの事務所の地下よ。私たちの他には誰一人いないからね」
事務所の地下？　その言葉に俺は違和感を覚えた。なんせ彼女たちの後ろには、プロレスのリングのようなものがあるのだ。しかも俺は服を脱がされ、トランクス一枚になっていた。
「ここで１２人がかりであなたをやっつけてもいいんだけれど、あなたにもチャンスをあげるわ。これからこのリングの上で、私たちの一人一人と対戦しなさい。もしあなたが勝ったら、その場で解放してあげる。２人抜きしたら、あなたの望み通りにしてあげるわ。でも１２人全員に負けたら、そのときは覚悟してね」
「ルールは？」
俺は尋ねた。一対一での対戦なら、不意をつかれない限り負けないだろう。
「ルール？　何でもあり。ただし素手で戦うこと。両肩をつけての３カウントか、倒れて１０カ

ウント以内に立ち上がれなければ負け。プロレスやボクシングの決着のつき方と同じと思ったらいいわ」
何だ、それなら問題はない。これはラッキーと言うべきか。
「わかった。やってやるぜ」
俺はリングに上がった。

1

俺の最初の相手はユイカだ。１７７ｃｍの俺より１５ｃｍほど背が低い。こんな子が俺相手に戦うのか、ちょっとは手加減してやろう。

カーン、ゴングが鳴った。
「ちゃんと公平に裁いてくれよ」
俺はレフェリー役のエイコに言った。
「当たり前じゃない。最初に言っておくけど、ユイカを甘く見ない方がいいわよ」
俺はユイカに目を向けた。おびえた様子は全くない。それどころか表情に笑みが浮かんでいる。まあいい。俺の力を思い知らせてやる。俺は間合いを詰め、ユイカを捕まえようとした。ユイカ

はさっと身をかわすと、俺の腹を拳で突いた。
「ぐっ…」
息が詰まり、俺は片膝をついた。顔を上げると、相変わらずユイカは微笑みを浮かべている。
「くそっ」
俺は立ち上がり、再びユイカに襲いかかった。しかしユイカは俺の膝に蹴りを入れた。俺はその場に立ちつくした。そこに今度は回し蹴りが脇腹に飛んできた。俺は吹っ飛ばされた。
「ユイカは空手の心得があるからね。せいぜいやられないように頑張ることね」
リングの外からトモミが言った。そうなのか。ユイカを見ると余裕綽々の顔で、俺が立ち上がるのを待っているようだ。
「はっ！」
立ち上がった俺を、ユイカの容赦ない蹴りや突きが襲った。俺は防戦一方になった。こんな馬鹿な。この俺がこんな小娘に。
「そろそろとどめよ」
そう言うとユイカは俺の顔面めがけて蹴りを入れてきた。俺は両手でガードしようとしたが、明らかに遅れた。やられる！ 俺は思わず目を閉じた。しかし衝撃はやってこなかった。おそるおそる目を開けると、鼻先から数センチのところにユイカの足の裏があった。ユイカはニコッと微笑むと足を下ろし、棒立ちになっている俺の金玉を思い切り蹴り上げた。

「ギャー！」
俺は叫び声を上げて、地面を転げ回った。楽しそうな声でエイコがカウントを数えるが、俺はそれどころではない。１０カウントが過ぎても、俺は立ち上がることができなかった。

２

「次は私の番よ」
ヒサエがリングに上がった。
まだ玉が痛む。俺は顔をしかめて立ち上がった。少し休ませてほしい、そんな俺の気持ちを無視するかのように、ゴングが鳴った。

ヒサエは俺の膝の外側を蹴ってきた。俺はよけきれず、まともに蹴りを受けた。しかしたいした蹴りではない。安心している俺の膝をヒサエは連続して蹴ってきた。
「このっ！」
調子に乗りやがって。俺は蹴り足を捕まえようとした。しかしヒサエはすっと足を引き、俺は少しバランスを崩した。その瞬間を逃さず、ヒサエは俺の後ろに回り込み、膝の裏を蹴った。俺は前のめりになり、膝立ち状態になった。背後から体当たりを受け、俺はうつぶせに倒れた。

「いくわよー！」
ヒサエは倒れた俺の足を取り、器用に締め上げた。サソリ固めだ。この子、何でこんな技を知ってるんだ？
「へーイ、ギバーップ？」
俺の足を締め上げながら、楽しそうにヒサエが言う。サソリ固めは確かにがっちりとは決まっているが、しょせんは女の子の力だ。俺は無理矢理振りほどいた。しかし足にはさすがに痛みが残っている。俺が痛みに耐えて立ち上がろうとしたとき、ヒサエがこちらにダッシュしてくるのが見えた。右腕が俺の喉元に入る。ラリアットをまともに受けて、俺は後ろに倒れた。すかさずヒサエがカバーにはいる。
「ワン」
エイコがカウントを取り始めたが、俺はヒサエの体を下から持ち上げた。んっ？　この感触は？
柔らかい感触に驚いて見ると、俺の両手はヒサエの両胸を持ち上げていた。ヒサエの顔が怒りの表情に変わる。

「このスケベ」
ヒサエは俺に馬乗りになると、顔面にビンタを浴びせかけた。１０発ぐらい食らっただろうか。今度は再び俺の上に乗ってカバーしてくる。また押しのけてやろうとした瞬間、股間に激痛が走

った。
ヒサエは俺の両肩を押さえつけたまま、右手で俺の金玉をしっかり握り込んでいた。俺はヒサエを押しのけようと思ったが、激痛で抵抗するどころではない。
やけにゆっくりとエイコがカウント３を数えた。ヒサエはよほど怒っていたのだろう。決着がついて立ち上がり際に、平手で俺の金玉を思い切りひっぱたいた。

３

次の相手はトモミだった。にっこり笑って俺の方を見ている。１７０ｃｍ近くあるだろうか。しかしそれよりも目を引くのは大きな胸だ。俺は苦痛と戦いながら立ち上がった。痛みは全く引いていない。立ち上がっても両手で金玉を押さえたまま、前のめりの状態だ。
「どうしたの？　タマタマが痛いの？　私も蹴っちゃおうかな？」
楽しそうな声でトモミが言う。俺の心は怒りであふれたが、今の状況では満足に戦うこともできないだろう。
「せいぜいそうやってタマタマをカバーしておくことね。隙があったらすぐに蹴り上げてあげるからね」

ゴングが鳴っても俺の体は反応しきれなかった。トモミは無抵抗に近い俺の顔面を、面白そうに連打した。俺は自分の顔が腫れ上がってくるのがわかった。目の上が重くなり、視野を狭めてくる。どれだけ顔面を殴られたかわからない。思わず俺は顔を手で防いだ。
「甘い！」
その瞬間、トモミは俺の股間を蹴った。いや、蹴ったと言うより、足を当てたと言った方が正しいだろう。軽くぽんと当てられただけだが、それまでユイカとヒサエに痛めつけられていた俺の玉は激痛に襲われた。俺は股間を押さえてひざまずいた。
「最初に言ったでしょ。カバーしておかないとタマタマを蹴り上げるよって。今度は本気で蹴るから、覚悟しておきなさい」
余裕たっぷりにトモミが言った。この女、楽しんでやがる。しかし状況は圧倒的にトモミの方が有利だ。俺は痛む股間を押さえたまま立ち上がった。
「そうそう、そうやってしっかりとタマタマをカバーしておきなさいよ」
再びトモミが俺の顔面をタコ殴りにする。俺の目は腫れ上がり、視界は完全に塞がれた。
「トモミ、いいかげんにやっつけちゃいなさいよ」
リングの外からエツコが声をかける。
「そうね、そろそろいい頃かな」
そう言うとトモミは、俺の背後に回り背中を押した。俺は前のめりになり、ロープにぶつかっ

てはね返った。トモミは今度は俺の背中を押しながら、足をかけた。俺は前に倒れた。
「ぐわっ！」
俺は喉を締め付けられるのを感じた。おそらくトップロープに首が引っかかっているのだろう。俺は両手でロープを押しのけた。
「これで終わりよ」
その機を逃さず、トモミは背後から俺の股間を蹴り上げた。トモミの足は無防備になった俺の金玉を確実にとらえた。俺はそのまま激痛にのたうち回った。

１０カウントが過ぎても俺は立ち上がることができなかった。それどころかもう戦うどころの話ではない。
「さあ、早く立ちなさいよ」
ハルミが言う。
「ここで休憩を入れてあげてもいいんじゃない？」
エリコが言う。
「まだ目も開けられないみたいだし」
「えー？そのためにわざわざ顔を集中攻撃したのに」
トモミが言った。

「でも、確かに目が見えない相手と戦うのは、フェアじゃないわね。少し時間をあげましょう。カオリ、氷を持ってきて」
エイコの一声で休憩が入ることになった。俺は腫れ上がった顔面を氷で冷やした。
「金玉も冷やしておいた方がいいよ」
エイコが言う。
「何なら私が冷やしてあげようか？」
俺はエイコの手から氷の入った袋を奪い取り、トランクスの中に突っ込んだ。少しは痛みが和らいできた。
「ごめんねヒロコさん、せっかくハンデを作ってあげたのに…」
すまなそうにトモミが言う。
「いいわよ、気にしないで。私も何とかやってみるから」
気丈にヒロコが答えた。

4

完全とは言わないまでも、ほとんど回復した俺の次の相手はヒロコだ。俺はヒロコの方を見た。表情が少しこわばっている。

この子には勝てるだろう、ゴングが鳴った瞬間、俺はヒロコに飛びかかった。
「きゃっ」
ヒロコはあわてて身をかわした。俺はさらに襲いかかった。ヒロコはじりじりと後ずさりしている。俺はヒロコをコーナーに追いつめた。
「もう逃げ場はないぜ」
俺は胸をめがけてパンチを繰り出した。ヒロコはかわしたが、わずかに体にかすった。続けて俺は蹴りを繰り出した。意を決したかのように、ヒロコは蹴りをかわすと俺にしがみついた。
「ぐっ！」
ヒロコに膝で金玉を蹴り上げられ、俺の動きは止まった。股間を押さえてひざまずく。ヒロコはその俺の上半身に体当たりをしてきた。俺は後ろにひっくり返った。ヒロコはそのまま俺に覆い被さった。エイコがカウントを数える。俺は払いのけるよりも、苦痛をこらえるので精一杯だった。カウント3、俺の4連敗が決まった。

「ヒロコさん、やったわね」
トモミが声をかける。

「普段の練習の成果ね。でも本当に勝てるとは思わなかったわ」
興奮した声でヒロコが答える。練習の成果？　何の練習だ？
「私たちはね、ワタルのところの練習生を借りて、毎週護身術の練習をしているのよ」
エイコが言った。ワタルというと、あのプロレスラーの？
「いろいろと変な男につきまとわれることもあるからね。その対策なんだけど、こんなところで役に立つとは思わなかったわ」
リサが言った。
「まあ、毎回全員が参加するわけではないし、ハルミみたいに練習する必要のない子もいるけれど。レスラー相手に練習しているから、ヒロコが負ける心配なんて全くしていなかったわ」
「でもエイコさんと違って、練習以外でやっつけたのは初めてなんですよ」
そんな子たちと戦っているのか、俺は改めて恐怖を覚えた。残る相手は8人、果たして1人でも倒すことができるのだろうか？

5

「私の出番ね」
5番目の相手はエミだ。ついつい大きな胸に目がいってしまう。いかん、俺は頭を振った。煩

悩にとりつかれてはやられてしまう。俺は注意深く半身の姿勢をとった。幸いさっきのヒロコの蹴りはそれほど強烈ではなく、痛みはもうほとんどひいている。

先に攻撃を仕掛けたのはエミの方だった。俺の顔面にパンチを入れようとする。俺は腕で受け止めた。次の瞬間、エミは膝で俺の股間を蹴り上げようとしたが、その動きを完全に予想していた俺は、太ももで蹴りを受け止めた。

「少しは学習したようね。でもいつまで続くかしら？」

エミは余裕たっぷりの顔で嘲るように言った。そして次々に攻撃を仕掛けてきた。しかし俺は細心の注意を払って、ダメージを受けないようにした。顔面、腹、そして必ず合間に狙ってくる股間、そのどの攻撃も、俺にダメージを与えることはなかった。

だんだんエミは肩で息をするようになった。そろそろスタミナが切れてくることだろう。俺は初めて攻撃に出た。俺の右拳がエミの腹に食い込む。エミはその場にしゃがみ込んだ。そのまま俺はエミを蹴飛ばそうとした。しかし右脚を後ろに振り上げた瞬間、とっさにエミは俺の左脚にしがみついた。

「このっ、放せ！」

俺はエミを振り払おうとしたが、エミも必死でしがみついている。そのときふくらはぎに鋭い

痛みを感じた。この女、噛みつきやがった！

俺はエミの髪を両手で引っ張り上げた。苦痛にゆがんだエミの顔が、一瞬ニヤッと笑った。エミは俺の脚から手を放すと、両手でしっかりと俺の金玉を握った。

「ギャー！」

俺はエミの髪を掴んだまま、地面に倒れ込んだ。エミも手を放さない。それどころか、ますます力を入れて金玉を握ってくる。

「さあ、早くギブアップした方が身のためよ。このままタマを握り潰しちゃおうかなぁ？」

勝ち誇った笑顔を浮かべてエミが言う。俺はもう限界だ。

「ギ、ギブアップ」

苦しみながら俺は声を絞り出した。

ようやく俺の金玉は解放された。しかしまだ下腹に響き、立つこともできない。エミは嘲るような笑顔を浮かべ、俺を見下ろしている。

「おまえら、こんな技をプロレスラーから教わっているのか？」

苦痛の中、俺は尋ねた。

「勘違いしないでね。確かに練習相手はワタルさんのところの練習生だけど、技を教えてくれる

のはエイコさんよ」
「だって、実際に男に襲われたときの反撃法は、同じ女の方がわかりやすいでしょ。それに、私たちがやっているのは、いかに効果的に金玉を攻めるかだから、男から進んでは教えてくれないわよ。ワタルのところの練習生も、最初は私たちに会えるって喜んでいたけれど、２回目から来るのを嫌がっちゃってさ。まあなだめたり脅したりしながらやってるんだけれどもね」
女たちが編み出した男だけを倒すための技、俺の背中を冷たいものが走った。

6

さっきエミから強烈に握られたおかげで、痛みは全くひいていない。しかし目の前には次の対戦相手のリサが立っている。俺は股間を押さえたまま立ち上がった。
俺はリサの方を見た。これまでの相手の中で一番小柄だ。でもこの子も急所攻撃をマスターしているに違いない。油断は禁物だ。

「いくわよ」
リサは攻撃を開始した。エミ同様、顔面・胴体・股間と攻撃を散らしてくる。俺は右腕で顔面を、左手で股間をガードした。胴体への攻撃はできるだけかわそうとしたが、思ったようによけ

ることができない。それに腹を打たれたときに、衝撃が下腹に響いてくる。
それを見てとったのか、リサの攻撃はだんだん腹部に集中し始めた。脇腹を打たれ、腹に膝を入れられ、俺はうずくまった。
今度は俺の顔面をリサの蹴りが襲う。右腕でガードをしているが、その上から容赦なく蹴ってくる。何発蹴られたかわからない。右腕はもう痺れてしまっている。今度は勢いをつけて俺に体当たりをしてきた。俺はもんどり打って後ろに倒れ込んだ。リサは仰向けになった俺の腹の上に飛び乗ってきた。胃液がこみ上げてくる。

「さあ、どうしようかなぁ」
リサは歌うように言うと、俺の左腕に飛び乗った。２度、３度と飛び乗られ、俺の左腕は麻痺してきた。
「そろそろね」
リサは俺の左腕と胴体の間に足をこじ入れると、思い切り振り上げるようにした。そのため、俺の左手は股間から離れてしまった。
「チャンスよ」
リサは俺の両足首をとらえた。かかとを俺の股間にたたき込む。電気アンマだ。それも金玉だけを的確に狙ってくる。俺は苦痛に身をよじった。もう耐えられない。俺はギブアップした。

苦痛に体を丸めている俺の姿を冷ややかに見ながら、ハルミがリングに上がってきた。

7

「もう二度と立ち上がれないようにしてやる」

まだ苦痛から解放されない俺を指さし、ハルミが言い放った。

無情にもゴングが響いた。

ハルミは一目散に突進してきた。俺は両手で股間を押さえたまま、立っているのがやっとだった。ハルミは俺に体当たりして、ロープ際まで押し込んだ。為す術もなく、俺はロープに体を預ける形になった。ハルミはそのまま俺の顔面を攻撃してきた。しかも殴ってくるだけではなく、俺の両目に指を入れようとまでしてくる。

俺は固く目を閉じて耐え続けた。すると今度は俺の首に手をかけた。喉仏を両手の親指で圧迫してくる。く、苦しい。俺は両手でハルミの手首を掴んだ。その瞬間、ハルミは俺の手を振り払い、両腕を俺の両脇に入れて抱きついてきた。俺はバンザイをした格好になった。1メートル超のIカップが俺の胸に当たる。しかしその感触を楽しむ間もなく、これまでに味わったことのないほどの激痛が俺の股間を襲った。

ハルミは俺の両手を固定したまま、金玉に膝蹴りをたたき込んだのだ。俺は苦痛に身をよじった。しかしハルミとロープに支えられ、倒れることもできない。

「私にいやらしいことを言った罰よ。あなたの金玉、私が蹴り潰してあげる」

怒りに燃えたハルミの蹴りはとどまることを知らない。俺はギブアップしようとしたが、あまりの苦痛に声が出なかった。何十発目の蹴りだろう、俺の体は宙に浮き、これまでと違う感覚、喪失感とでもいうのだろうか、を味わって気を失った。

意識を取り戻したとたん、再び激痛が俺を襲った。リング上にはハルミ以外の女たちも上がっていた。

「動かない方がいいわよ。冷やしているから、安心しなさい」

エイコが言った。

下半身に痛みだけではない違和感を覚えて、俺は上半身を上げた。エリコが俺の金玉に氷を当てて冷やしている。俺はトランクスも脱がされていた。それ以上に俺を驚かせたのは、血溜まりができていたことだ。

「宣言通り1個蹴り潰してあげたわ。あなたのキ・ン・タ・マ」

勝ち誇ったようにハルミが言った。俺は自分の顔が青ざめていくのがわかった。

「1個あれば男としての機能は大丈夫よ。もっとも、最後までもう1個が残っていれば、の話だけれどもね」
トモミが言った。
「ちょ、ちょっと待ってくれ、まだやるのか？」
「当たり前でしょう。まだあと5人残ってるんだから。少し休憩はあげるけど、ちゃんと最後まで相手してもらうからね」
エイコの言葉に俺は絶望感を感じた。
「それにしても小さいわね、あなたのちんちん。タバコぐらいしかないじゃない。そんなのでよく私の胸に挟めなんて言ったわね。私の胸に挟んでもらいたかったら、せめて牛乳瓶ぐらいになってから来な」
軽蔑したようにハルミが言い、他の女たちもくすくすと笑った。

8

もっと休憩がほしかったが、それはエイコが許さなかった。エツコはすでにスタンバっている。再び戦いが始まった。

片方の玉が潰れたせいか、バランスが悪い。俺はできるだけ間合いをとった。
「エツコ、ちんちんばっかり見てるんじゃないよ」
リングの外からトモミが声をかける。そう言えばさっきから、エツコの視線は俺の股間のあたりに来ていた。
「変なこと言わないでよ、トモミ。見てないわよ」
顔を真っ赤にしながらエツコが答えた。
「そうよね、あんなに小さくちゃ、近づいてじっくり見ないと見えないわよね」
エミが言い、他の女たちも笑った。
俺は頭に血が上った。股間を手で押さえたまま、やみくもにエツコに突進した。エツコは身をかわしながら俺の脚を引っかけた。俺はその場に転倒した。
そんなことを10回ぐらい繰り返しただろうか。再び突進した俺をかわしながら、今度はエツコは脚を引っかけなかった。俺はそのままロープにぶつかり、はね返った。俺はバランスを崩しながら、後ろ向きに進んだ。と、その脚をエツコは思いきり払った。俺は後ろ向きに倒れ、思わず受け身をとった。仰向け状態の俺の顔の上に、エツコの笑顔があった。しまったと思う間もなく股間に激痛が走った。
エツコの膝がノーガードになった俺の金玉をとらえていた。苦しんでいる俺の両肩をエツコは

押さえた。カウント3、フォール負けだ。

「いいぞ、エツコ。ナイスキック」

「おちんちんは小さくて見えにくかったけど、タマタマは大きく腫れ上がって見やすかったからね」

「やだエツコ。タマタマじゃないわよ。もう今は一個しかないんだから」

「そうか、タマタマじゃなくてタマと言わなくちゃいけないわね」

女たちの会話を、俺は地獄の苦しみの中で聞いていた。

9

「戦う前に言っておくわ。私に負けるようなら、残りの3人には絶対に勝てないからね。あなたにとってラストチャンスだと思っていいわ」

リングに上がるなりカオリが言った。

ゴングが鳴るなりカオリは殴りかかってきた。俺は股間をカバーしたまま攻撃をかわした。隙

を見て攻撃に転じないといけないが、なかなかチャンスがない。そうしているうちに、カオリの攻撃が俺の顔面をとらえだした。数十発のパンチを顔面に受け、俺は股間をカバーしたまま仰向けに倒れた。

「タマをカバーしていれば大丈夫だと思っているんでしょ」

そう言うとカオリは、仰向けになったままの俺の両足首を掴んで、コーナーの方へ引きずっていった。そして今度はリングの外に降りて俺の両足首を掴むと、思いっきり引っ張った。

「ぐっ！」

両手でガードされた俺の股間は、コーナーポストにたたきつけられた。カバーの上からとはいえ、ある程度の衝撃が走る。カオリはなおも体重をかけて引っ張る。俺の両手の甲は切れて出血しだした。

「このままじゃ埒があかないわね」

そう言うとカオリは再びリングに上がり、俺の脚をセカンドロープに固定した。そしてカオリ本人はコーナーポストに上がった。

「どのぐらい耐えられるかしら？」

そう言うとカオリは俺の股間に飛び降りてきた。血まみれになった俺の両手を再び痛みが襲った。5、6回続いただろうか。俺は痛みでつい両手を股間から離してしまった。

「バイバイ」そう言ってカオリは無防備になった俺の金玉に飛び降りた。カオリの全体重が金玉にかかる。その激痛に俺はのたうち回った。１０カウントが数えられ、そのまま俺の負けが決まった。

苦しんでいる俺の気持ちに関わりなく、１０人目のメグミがリングに上がった。ついついその爆乳に目がいってしまう。

ゴングが鳴ってもメグミは戦う素振りを見せなかった。哀れんだような目で俺を見ている。

「これまでさんざん痛かったでしょう、かわいそうに」

そう言うとメグミは、いきなり服を脱ぎだした！

え？　俺はびっくりした。一体どういうことだ？

残念ながら服の下には水着を着ていた。ポスターにもなっている黄色のビキニだ。ビキニ姿になったメグミは、リングに寝そべった。

「もう苦しまなくていいわ。私が癒してあげる」そう言って手招きをしてくる。その言葉とその姿に、俺は理性を失った。俺はメグミに近づくと、水着のブラに手をかけようとした。

「そんなわけないだろ！」

メグミの態度が豹変した。俺の股間を激痛が襲う。メグミは両手でしっかりと、一個だけ残っ

た俺の金玉を掴んでいた。苦痛に俺は絶叫した。

「本当に男っていうのは、どうしようもない生き物だね。金玉一個潰されていても、すぐ性欲に負けるんだから。残りの一個も潰されないと懲りないようね」

メグミはそう言うと、俺の金玉を力一杯締め上げてくる。

「ギ、ギブアップ」

俺は激痛の中、声を絞り出した。

「えー、聞こえないなー」

そう言うとメグミはさらに力を入れてくる。

「ギブアップ、ギブアップ！」

俺は何度も叫んだ。

「こら、メグミ、離しなさい！」

レフェリーのエイコが無理矢理メグミを俺から引き離した。

「せっかくこのまま握り潰してやろうと思ったのに」

「相手はギブアップしてるんだから、離さなくちゃ駄目でしょ」

「そんなこと言って、本当はエイコさん、自分が潰したいだけなんじゃないの？」

「でも、タマタマが２個とも潰れたら、男の人って死んじゃうんじゃないんですか？」
リサが口をはさむ。
「やだー、リサさん。金玉潰れたぐらいじゃ、死んだりしませんよ」
ハルミが答える。
「そうだよ。それぐらいで死ぬんだったら、私やハルミは、これまで何人も殺してきたことになるよ」
エイコも同調した。
「でもこいつ、本当に馬鹿だね。おかしくて、胸がよじれるほど笑ったわ」
自分の胸を揉みながらメグミが言った。
「あなたも、玉がよじれるほど苦しんだんじゃない？」
「いやーねー。玉をよじったのはメグミじゃない」
ヒサエが突っ込む。
「でもさあ、この男、タマ一個しかなくても、勃ってたよね」
「こんな状況でもちんちんって勃つんだね。もっとも、目の前でメグミに悩ましいポーズをとられたら仕方ないか」
「でもやっとこさ、タバコからウィンナーになった程度だったけれどもね」

女たちは口々に好き勝手なことを言って笑った。
「痛みがひくまで待っててあげるよ」
次の対戦相手のエリコが言った。さっきのメグミは俺より２０ｃｍぐらい低かったが、このエリコは俺と４～５ｃｍ程しか違わない。とにかく俺はエリコの言葉に甘えて、しっかりと休憩を取った。
「じゃあいくよ」
そう言ってエリコはガウンを脱いだ。アメリカの国旗がデザインされたコスチューム。そしてその両手には、ボクシングのグローブがつけられていた！
「お、おい、ちょっと待てよ。ルールでは素手で戦うはずだったろ」
「えー？　グローブはめてちゃ駄目なの？」
「駄目駄目、はずしてくれ」
渋々エリコはグローブをはずした。そのやりとりを見ながらレフェリーのエイコはクックッと笑った。
ゴングが鳴るとすぐにエリコは殴りかかってきた。

「ジャブ、ジャブ、ジャブ、ストレート！」
エリコのパンチは俺の顔をとらえてはいたが、軽くてダメージを受けるほどではない。
「フック、フック」
さらにエリコはパンチを繰り出す。俺は後ろにのけぞってかわした。

突然エリコの姿が消えた。え？　どこへ行った？そう思ったとき、股間をガードしていた俺の両手がぐいと引きずり下ろされた。
「アッパー！」
俺の意識は粉々に打ち砕かれた。俺の足下にかがみ込んでいたエリコは、あごではなく金玉にアッパーカットをたたき込んだ。金玉の裏側を叩き上げられた俺は、あまりの激痛に気を失った。

気がつくと目の前にエリコの顔があった。
「ごめんね」
笑顔を浮かべてエリコが言った。
「一応今のところは玉は潰れていないけど、次の相手はエイコちゃんだからね。覚悟を決めた方がいいわよ」
「グローブをつけていたのはエリコなりの優しさだったんだけれどもね」

エイコが言った。
「そんなんじゃないわよ、エイコちゃん。素手じゃ早く勝負がつきすぎるから、グローブでやわらげようと思っていただけよ」
微笑みながらエリコが答えた。

最後の相手、エイコは黒いチャイナドレス姿でリングに上がった。
「私が代わりにレフェリーをやるわ」
そう言ってハルミがリングに上がろうとした。
「駄目よ、ハルミ。ハルミは絶対に駄目」
エイコが制した。
「レフェリーなしでいきましょう。もうレフェリーなんて、意味無いでしょう。これが最後なんだし」
ハルミは不満そうだったが、結局レフェリーなしで戦うことになった。

「かかってきな」
エイコは俺を挑発した。
「ここまで全敗できているんだから、私に勝たないことには、命の保証はないわよ」

しかし俺は慎重になっていた。エイコはこれまでの１１人より強そうだ。俺は股間をガードしたまま、エイコを睨みつけた。

「何よ、かかってこない気？　それでも男かよ、金玉ついてるのかよ」

そう言ってエイコは視線を俺の股間の方に向けた。

「そうか、一個しかついてないんだったね。その残りの金玉も潰してやるよ」

エイコは両手で俺の胸を突いてきた。吹っ飛ばされそうになるのを何とかこらえた。さらにエイコは突きやパンチを繰り出す。俺は両手で股間をカバーしたまま攻撃をかわそうとしたが、全てをかわすことはできなかった。何十発目かの突きが俺のあごをとらえた。俺は後ろに反り返りながら、何とかバランスを保とうとした。しまった！

その拍子に両手が股間から離れてしまった。しかし股間に衝撃はやってこなかった。

「どうしたの？　びっくりした顔して」

エイコが笑みを浮かべながら言った。

「別に今金玉を蹴らなくても、最後の最後に蹴ればいいわ。あなたは金玉さえ守れば私に負けないとでも思っているの？そんなに甘くないわよ。他の子たちはともかく、ハルミやユイカは金蹴りなしでもあなたに勝てたんだからね」

確かにそうだ。ユイカには翻弄され続けていたし、ハルミに対しては為す術がなかった。それ

にヒサエも最初は金玉を全く狙っていなかった。

「もちろん勝つために金玉を狙った子もいるけれど、まあ、私たちを侮辱した罰として、男の急所を痛めつけているというのが本当のところね。もちろん私も蹴り上げてあげるわよ、あなたの金玉。ただし勝負がついてからね」

そう言うと、エイコは再び攻撃を開始した。俺は顔面や腹を殴られ、脚を蹴られ、意識が朦朧としてきた。両手も股間のガードを忘れ、上半身と顔面をカバーしている。

「やっ！」

気合一閃、エイコの回し蹴りが俺のこめかみをとらえた。俺は吹っ飛ばされながら意識が薄れていくのを感じた。リングに這いつくばる。エイコはその俺を引きずり、無理矢理コーナーポストの上に押し上げた。俺はコーナーポストの上に座る形になった。両手はトップロープに、両足はセカンドロープに絡まっている。

「それじゃあとどめを刺してあげる」

にっこりと残酷な笑みを浮かべてエイコが近づいてきた。

「破！」

かけ声と同時に、エイコは俺の一個だけ残った金玉を両手で突き上げた。俺の体は宙に浮き、リングの外に吹っ飛んだ。

「気がついた？」
ユイカの笑顔が目の前にあった。意識が戻ると同時に、股間に激痛がよみがえった。
「エイコさんに潰されちゃったわよ、あなたの残りの金玉も」
悔しそうにハルミが言った。
「まあ、私たちを侮辱した代償だからね、あなたの金玉は」
メグミが言う。別に悪びれた様子はない。それが当然といった表情だ。
「エイコさん、どうします？　ちんちんも切っちゃいましょうか？」
ハルミが俺の股間を恨めしそうに見ながら言った。
「いや、どうせもう男としては役に立たないんだから、このぐらいで勘弁してやろう」
エイコはそう言うと俺の腹を殴った。俺は再び気を失った。

意識が戻ったときには病院の中だった。一応治療はされたが、金玉は2個とも完全に潰れていて、二度と機能することはないそうだ。俺は残りの半生を病院のベッドの上で送ることになった。精神に異常をきたし、うわごとのように女たちの名前を口にしながら。